

ある15歳の死

女中学生之死

チェン タン イェン
陳丹燕 作 中由美子 訳

【訳者】

中由美子 (なかゆみこ)

長崎市に生まれる。中国児童文学研究家。

翻訳児童文学「世界の子供たち」同人。香港児童文芸協会会員。

中国児童文学研究会会員。日中児童文学美術交流センター理事。

訳書に「フランスから来た転校生」(佑学社刊)がある。

【ある15歳の死】

女中学生之死

陳丹燕作

中由美子訳

福武書店 1990

192P, 19cm **NDC929**

原題: 女中学生之死

ある15歳の死

1990年8月10日初版発行©

1991年5月10日2刷発行

訳者: 中由美子

装丁: 山崎英樹・前田浩志

発行所: 福武書店

〒102 東京都千代田九段南2-3-28 Tel. 03-3230-2131 (代) 振替・東京9-166266

発行者: 福武總一郎

印刷: 凸版印刷 製本: 難波製本

Published by Fukutake Pub., Co., Ltd., Tokyo, JAPAN.

ISBN4-8288-4913-0 C8397

(定価はカバーに表示してあります)

ある15歳の死

女中学生之死

陳丹燕^{カン ダンカン} 作 中由美子^{ナカユミコ} 訳



ある
15
歳の
死

一九八六年三月二十一日

三方を家に囲まれたニン・クの家には、天窓があるだけで、中は井戸の底のように薄暗い。夕暮れどきで、湿った、かびくさいにおい、それにニン・クの母親が吸う安タバこの、いがらっぽいいにおいが立ちこめている。その中で、女性新聞記者の薄緑色の服が、とりわけ生き生きとした草のようだ。記者は、汚れてべたべたする木のいすに無表情にすわって、たくさんの本に向かい合っている。ドストエフスキー、クリステイ、アンデルセン、ドライサー、モーム……。ドストエフスキーの『死の家の記録』には、「大海を航海するには舵取りが頼りだ、革命は毛沢東が頼りだ」という、林彪の肉筆を印刷したカードがはさんである。

ベッドの上には、葬式に参列した親戚がくれた、真^{*}赤なふとん皮がほったらかしにされている。

* 中国の下層階級の人たちは葬式に真赤なふとん皮を贈る習慣がある。

記者は、ニン・クのノートを手にとった。それには、ニン・クの氣に入ったらしいことばが書きためてあった。一ページ目には、新聞の文章が書き写してある。

「仮に、神が真理をくださるとしても、わたしはその贈り物を拒絶するだろう。たとえ苦しくとも、自分の力で探しだしたい、とレッシングはいう」

記者は、ていねいにその部分をなでた。その文章は、記者自身が書いたものだった。この文章を書いたことで、記者は後から主任にひどく批判された。その文章をニン・クが書き写しているということが、記者の心をつかみどころのない不安でいっぱいにした。

数日前、記者は一人の女子中学生が自殺したことを聞いた。それも、小学生ならだれでもあこがれている、龍門^{ロシメシ}中学の生徒だということを。そのとき、記者は新聞社の廊下^{ろうか}にいた。丸窓の外では、まだ芽ぶかない木々の間を、春の強い風が吹きまくっていた。記者は少しばかり心が高ぶり、悲しくなった。青春の死。「一人の女の子がゆりかごと墓場をつなぐには、きっと何かがあったにちがいない」と、記者の心の中の声がしきりに叫んでいた。

記者がそんなことを思い出している間に、近所の人が何人か来ては、すぐに帰っていった。会社帰りの慌ただしい自転車の流れの中を、ニン・クの母親がニン・クの写真を握りしめて、のろのろ歩いてたと教えてくれた。母親が汚い食堂で酒を飲みながら、泣いていたという人もいた。

母親がいつ帰ってくるのか、だれも知らなかった。もうしばらく待つ、と記者は答えた。

(待たなければ)

大理石の骨つばが夕暮れの明かりの中で白く光っているのが、記者をとまどわせた。解剖台の上で、ニン・クの体は、土の上に落ちた薄紅色の朝顔のようだった。生き生きとして、透明で、青春そのものだったのに、どうして急にこんな小さな骨つばに入れられてしまったのだろうか。年とったからでもなく、病氣だからでもなく、戦争でもなく、交通事故でもなく。死にたくて、自殺したのだ。

へやのすみの薄暗い壁に、ニン・クの写真がかけてある。若いというだけで、うっとりするよ
うな、このもしいものがにじみでている。ただ目だけが、静かにいつまでも燃え続ける石炭のよ
うな、何かしら迫ってくるような光を放っている。

屋根がわらの上で、かろやかに、すばやい足音がした。

一九八五年六月二十一日（ニン・クの日記——中二）

だれかが、いった。お日様がのぼる前に、地面に九つの輪を一つずつずらして描く。そして、
九番目の輪の真ん中に立って、空に向かって心に思うことをいう。苦しいこと、うれしいこと、

なんでもいい。そしたら神様が聞きつけて、祈った人を助けてくれるって。

寮のへやで、わたしは夜が明けないうちに起きた。ルームメートのティンティンは、死んだように眠っている。前もって見つけておいた場所に、輪を描いた。しゃんと立って顔をあげる。ふいに、日がのぼる前の夏の青空が、目に入った。広く、深く、わたしを抱きしめるようにおしよせてくる。日の光のない晴れた空は、なんともいえず優しい。だしぬけに、心の中でいろんなものがふくれあがり、ぎゅうぎゅうづめになってきた。熱くて、痛くて、今にもバクハツしそう。わたしは、ぼんやりつつ立っている。朝の風が、耳もとを通りすぎるのが聞こえる。首筋の血管が、ドクドクと脈打つを感じる。天上の優しい神様に話しかけたくてたまらないのに、ことばにならない。そのうちに、わたしは必死に叫んでいた。これまで、こんなに大きな声で叫んだことはない。自分のこんな声を聞いたこともない。いろいろなものを吐きだすような、鋭い口笛のような声。わたしの声は、雲ひとつない青空の奥まで聞こえたと思う。わたしはなんていったの？ わからない。でも、神様にはわかるだろう。心の中から出てきた声だもの。

今学期になって急に、こんなふうになることが多くなり、気持ち混乱してきた。腹立たしく、物悲しくなった。自分でも、なぜだかわからない。静かにいすにすわっているときなど、自分が爆弾のようだと思うことがある。コチコチと動いている、今にもバクハツしそうな爆弾。

午後の授業が終わって、みんなは運動をしにいったしまった。孤独を感じる。一人教室にすわっているけれど、何もすることは無い。中二の女子たちが、並木道で歌を歌っている。いかにも楽しくってたまらないという感じの歌を。ラララララ、ラララララばかり。うらやましいような、やりきれないような気持ち。

シーソーで、一人遊び始める。抑えられていたものが、だんだんと心の深いところであらがい始めたのを感じる。大声で叫びたい。運動場を十周も走りたい。だれかと、とことん取っ組み合いのけんかをしたい。見てるだけでも興奮するようなディスコダンスをおどりたい。でも、わたしにはできない。わきあがるものを抑えようとする力が、わたしをいすの上にくぎづけにする。その上、人と口をきけなくした。ひきだしにかぎをかけて、わたしを閉じこめるように。人には、物憂そうにしか見えないだろう。心の中の戦いがどんなに苦しいか、だれにもわかりはしない！わたしは、いったいどうしたのだろう。突然に、自分がわからなくなったみたい。だけど、自分がわからないじゃない。世の中だってわからない。『北京の思い出』のシャオインズとおんなじ。どの人がいい人で、どの人が悪い人なのか、わからない。海と空の境が、はつきりしな

*映画の主人公で小学生の女の子。弟を学校にやるために盗みをしている青年に「お兄ちゃんはいいい人だと思ukai」とたずねられ、「海と空の境がわからないみたいに、いい人かどうかもわからない」と答える。

みたい。時には、世の中というのは透明な宝石、コハクに過ぎない、中のものはなんでもはつきり見える、と思うことがある。でも、何も見えない、真っ暗でこわいと思うこともある。

どの画集だったろう。一枚の絵があった。一人の少女が、恐ろしそうに絵の外側を見ている。少女の前には、大きな得体の知れない暗い影があった。その絵を見たとき、わたしはほんとにこわかった。悲しかった。暗い影は、この世の中かもしれないと思えて。その日、図書館はがらんとしていて、わたし一人が長いすにすわっていた。夜空の孤独な星のように。

もしかしたら、わたしたちがこれから歩いていく道には、きれいな花でおおわれた落とし穴や深いふちが、あちこちにあるのかもしれない。もしかしたら、世の中というのは森のようなもの。信頼や尊敬や友情という大きな木が生えていて、そこで暮らすのは、自由の香りの中で暮らすことなのかもしれない。でも、だれにもわかりっこない！ 幼いころは、こんな煩わしいことがあるなんて思いもしなかった。奇跡が起こればいいのに。大きな手が現れて、わたしを守ってくればいいのに。物語の主人公のように、だれかの広い背中後ろにかくれられたら……。

でも、人には、いつまでも天真らんまんてなんの悩みもない子どもだと思われていたい。母さんにも、わたしが悩み苦しんでるなんて、知られたくない。悲しませたくないし、まともに心配されるのもつといや。次々とやってくる先生たちの、まじめくさった、見当はずれなおしつけ

なんて、一番たまんない。いつまでも、子どもを見る目で、わたしを見てほしい。わたしに喜びを感じてほしい。

だけど、おとなが子どもは天真らんまんだと思うのも世代のギャップ。おとなは、子どもの心は白い紙だという。白が最も単純だと思っている。どういたしましてだ。白はこの上なく複雑な色なんだから。わたしは悩んだり、腹を立てたりしながら、暮らしの中に次々と現れる、様々なごたごたに立ち向かっている。

一九八五年六月二十二日（ニン・クの日記——中二）

また、じきにテストだ。龍中に入ってからというものの、テストにはまいてしまった。

入学したところ、小学校の担任だったリョウ先生は大喜びだった。今年わたしたちの学区の小学校卒業生のうち四人しか合格しなかったのだけれど、龍中に入ったということは、国の重要な人材を育てるところに入ったんだといって。

授業が始まってみると、テストの連続。後でわかったけど、これは龍中のしきたり。新入生に一発かますためなんだって。思ったような点数がとれないものだから、ほとんどの女子が泣いた。みんなに合わせる顔がないって。わたしは、点数はどうでもよかった。自分の頭のよさを信じて

たから。だけど、うっとうしい。抑えつけられるようで。

クラスのみんなは、雨でも晴れでも、寒かろうと暑かろうと、ただ勉強、勉強。テスト、テスト。終わりがない。必死で眠気を追いはらってる。先生がいかにもうれしそうに、来週テストをするという。みんな、ぼかんとして聞いている。びっくりした小動物みたいに。テストに備えての、うんざりするほどの復習問題。今夜の自習時間は、忙しいことだ。わたしは勉強が好き。勉強しないと、生きてられない。でも、こんな反復練習はやりきれない。これはロボットを訓練するためのもの。人間にはたまらない。

日の光がなんてすてき。夏になったばかり。木の葉はこんなにも茂り、つややかで、うるんでいる。わたしは大ざっぱだから、うまくいい表せない。国語の成績はいいんだけど、いざことばにしようとするとき力不足を感じる。心で感じるしかない。

ブラウスの袖口のボタンをはずした。暖かい風が腕をかすめていく。日なたのにおいのする風が、うぶ毛を吹きすぎる。とってもいい気持ち。うれしいような、悲しいような。お日様の光や風が、心の中まで入りこんでくるみたい。外のあの木。幹が細長くて、緑の葉っぱが茂ってる。女の子がうつむいて、もの思いにふけってるみたい。いいなあ、こういうの。

わたしはいろんなしぐさで、隣の列のルー・ハイミンに知らせようと思った。でも、ハイミン

は生まれつき一本につながつてゐるような濃い眉をしかめて、必死に黒板の問題を写してゐる。いかめしい、緊張した、さも重大そうなようす。この問題ができたら百点満点がとれる、とても思つてゐたい。やっと、わたしに笑いかけてきたけど、元氣がない。

ひげをそつてない先生の顔は、いつもと違つて何か意味ありげ。えらそうな、ふだんいうことを聞かないわたしたちに腹いせするような。要するに人々の支持を得られない、専制的で愚かな王様みたいなんだ。きらい。

わたしは、わざと写さない。わざと、外の風の中の、光の中の、土の中の小さな緑の木を見る。とつてもきれい。太陽の金色の光をばらまく大空は、なんてきれいなだろう。空つていったい何？ 空の上には何があるの？ 神様つてゐるのかな。西洋の神、東洋の仏、それに天使は？

みんなで、この世の生や死を見つめてゐる。じゃ、わたしはいつ死ぬんだろ。もし、自分の死ぬ日がわかつたら、まず最初に銀行強盗をしよう。お金をたっぷり持つて、世界一周をする。草原や森や大海原や乾いた砂漠を見にいくんだ。馬で行けたら最高。馬がほしい！ 麦わら帽子をかぶつて、弓矢か鉄砲を背に、風のようにかけていくんだ。

死ぬ五日前になったら、エジプトのピラミッドへ、ファラオののろいのかげを刻んである石を見に行く。ファラオののろいが現れて、その石を見た人が奇妙な死に方をした、という記事を

雑誌で見たとき、ひどく興奮したことを覚えている。自分がその危険をおかしたみたい。本當のここのような気がする。行って、秘密を探りだしたい。

生きて出てこられたら、今度はバーミューダの謎の三角地帯へ、UFOを見に行く。UFOに会えたらなあ。宇宙人がわたしをつかまえてくれたらいいのに。宇宙や地球のことを話し合いたい。宇宙人って、どんなかつこうをしているんだらう。SFに書いてあるように、いかめしくて、おもしろいのか。UFOの構造なんかも見てみたい。地球でも空飛ぶ円盤を作って、ほかの星の生命を研究しにいったらいいのに。

でも、突然に、わたしが死ななくてよいことになったら、そして、おとなになったら、宇宙の研究者になろう。こんなことを全部やり終えたら、死んでも本望。死ぬ前には、したいことをする。そして、人に何もいわれないうちに死んでしまふ。追いかけるように、だれも追いかけられない。いいなあ。

ふと、先生が目の前に立っているのに気づいた。わたしが一字も写してないので、ひどく怒っている。先生は、横暴そう、けいべつしたような、憎らしそうな目で、ちらりとわたしを見た。そして、黒板の前にもどると、みんなに写し終わったかどうかをたずねた。ばらばらと何人かが「はい」と答える。先生はサッと消すと、大きな紙を手に新しい問題を書き始めた。でも、ど

うしても腹立たしさがおさまらなかつたらしい。ふり向いて、チョークの粉の舞う中からいった。「ニン・ク、おまえ成績には自信があるんだな」

そうよ。この前のテストは百点満点で七十五・五点。クラスで最低点。でも、テスト前みんなが必死で暗記してるときに、わたしは電子関係の本を一冊読みあげた。他の人より、得たものは多いはず。点数なんか、自分が本当に学びたいものにはかえられない。小羊のように、人に追い立てられて勉強するなんて、一番いや。

だけど、ハイミンまでが変な目でわたしを見ている。わたしが何か悪いことでもしたみたいに。あざけるように。がっかり。金色の夕日の下の図書館にいた、やる気満々で、頭のいい男の子は、どこへ行っちゃったんだろ。わたしは、わざと万年筆をしまう。書くもんか。先生もハイミンも、わたしが落第点をとると決めたみたいだ。丸暗記してるみんなより、わたしは賢いし、知識だつてある、と大きな声でいってやりたい。まったく、もう！ 先生なんかきらい。クラスのみんなの不当な抑えつけもいや。みんな、最も簡単なことがわかってない。点数は、その人じゃないんだ。でも、みんなはわたしより強くて力があるから、わたしを抑えつけることができる。

外は、さっきとかかわらず、まだあんなにすてき。すばらしすぎて、なんかうそみたい。わたしのまわりの雰囲気は、こんなにいやらしいのに。すてきなものを、わたしはものほしそうに見て